

『すくまづ』

久川徳明

◆登場人物◆

東山毅	(ヒガシヤマ タケシ)	乗客
如月晴海	(キサラギ ハルミ)	乗客
宮城真人	(ミヤギ マサト)	乗客
長山桐子	(ナガヤマ キリコ)	乗客
豊田茜	(トヨダ アカネ)	乗客
元岩光子	(モトイワ ミツコ)	乗客
西川太郎	(ニシカワ タロウ)	運転手

※劇中、東山毅は、かなりやせていることを前提に渾名がつけられている。キャストの個性に合わせて渾名を付け直してください。

バス停に男と女。東山毅と如月晴海である。東山の手には、バッグ。バスが見えた。

東山 「次のにしない？」

東山を見向きもせず、

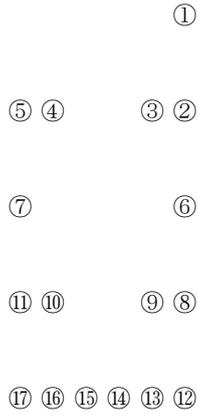
晴海 「しない。」

晴海、手を挙げて乗ることをアピール。

東山 「・・・」

バスが止まり、扉が開く。バスの座席は左記の様に番号を付ける。

※客席側



※舞台奥側

①は運転席。⑫～⑰は最後尾席。

東山、晴海の手を掴み。

晴海 「!？」

東山 「めんなさい。行って下さい。」

『ブシ・・・』(扉、閉まりかける)

晴海 「ちよつ、待っ・・・！待ってください。乗りますから。」

『ブシュー・・・』(開く)

晴海 「散々話し合って決めたことですよ。」

東山 「だから乗らないって言うてるわけじゃないじゃない。このバスはやめようって、そう言うてるだけじゃない。」

晴海 「そう言っ、朝から何台やり過ごした？」

東山 「だから次だよ。次には絶対乗る。約束する。絶対バスに乗るから。」

晴海 「どっちでもいいんですけどね。他にもお客さんがいるもんですから。」

運転手 「だから乗るって言うてるでしょ!」

東山 「・・・」

東山 「ちよつ、待ってよ。僕も乗ります。」

後を追う東山。扉が閉まり、走り出すバス。乗客の視線を気にしつつも、席に着く晴海。何気に顔を隠しつつ、その隣に座る東山。既にいる乗客は②と⑩⑪と⑬に。⑥に長山桐子、⑩⑪に豊田茜と元岩光子、⑬に宮城真人。④⑤に東山と晴海。

※登場人物の座る席は、必ずしもそこである必要はない。

東山 「思いつきり注目浴びちゃったね。」

晴海 「・・・」

東山 「わかったよ。もう逃げないよ。それに、もしかしたら、このバスで正解だったのかも。」

晴海 「・・・?」

東山 「だからお客がさ。」

晴海、あらためてバスの中を見渡す。

東山 「ね。」

晴海 「だから言ったでしょ。このバスにしようって。」

東山 「運転手は、ちよつとぶつきらぼうだけだね。」

晴海、ふたりを一瞥。ふたり見あって、ほくそ笑む。車内放送。

東山 「次は、自由が丘。自由が丘。お降りの方は、お近くの降車ボタンでお知らせ下さい。」

晴海 「誰か降りちゃう前にやらないと。」

東山 「もう少し人通りの少ないところで。」

東山、落ち着かない様子でキョロキョロと車内や乗客達を見てる。そんな東山を肘で牽制する晴海。東山、ふと何かに気づき、徐に立ちあがる。乗客の一人を見、無言で座る。

晴海 「どうしたの？」

東山、記憶が繋がりに。

東山 「ああっ！」

当然、乗客たちの目はふたりに。

東山 「やっぱりこのバス、失敗だったかも。いや、失敗だよ。そうに違いはない。だから次のにしようって言ったんだ。しようがない。計画は中止しよう。」

晴海 「何また、そんなこと言ってるの？」

東山 「連れがいたんだよ。そこ。中学ん時の同級生。」

晴海 「知り合い？」

東山 「まづいよ。」

晴海 「この際、同情は禁物だからね。」

東山 「同情されたいのは、こつち。あいつ・・・警察官。」

晴海 「ええっ!？」

東山 「高校出て、警官になったって。」

晴海 「ホントに？」

東山 「まだ転職してなかったらね。」

晴海 「うっそ・・・何やってんのよ。」

東山 「そんなこと言ったって。」

ソツと、その乗客を覗き込むふたり、目が合ったような気がして身を伏せる。その乗客、ノソリと席を立ち、車内を見渡し。

宮城 「ええ・・・ゴホンッ。皆さん、ご歓談中、或いはおくつろぎの中、大変申し訳ありません。たった今、このバスは、私、宮城真人がジャックしました。」

宣言し終わると同時に天井に向かって発砲。

曲 I N

溶暗。

曲 O U T

暗闇の中、桐子の声。

桐子 「・・・ええ。はい。そうです。」

溶明。
桐子、車内中央に立ち、携帯で電話中。宮城、出入り口付近、運転手の横に立ち、銃口を運転手に向けたまま、桐子を見てる。光子と茜は⑫と⑬に、晴海と東山は⑭⑮に。

桐子

宮城
桐子

宮城、銃口を桐子に。

「・・・だから、さっきからそう言ってるじゃありませんか。バスジャックなんです。バスジャック。人質とって何か要求するっていう、あれです。私？(宮城を気にしつつ)通りすがりの、ただの人質です。一般の。普通の人質です。電話するように言われたんです、犯人から。それで人質なんですけど、運転手さんと・・・だから言われたんですって。状況を伝えるようになって。犯人からです。(宮城をチラリと見、)ちよつと待ってください。代わって欲しいそうです。」

「状況だけ伝えてください。」
「でも、何か信じてくれな(くて)。」

宮城
桐子

「状況だけ伝えてください。」
「手が放せないみたいで、ちよつと無理みたいです。兎に角、いいですか？伝えますからね。人質は、運転手さんと・・・ええ、男の。その運転手さんと、他に男性が1人、女性が3(人)・・・ああ・・・4人です。私を入れて、女性は4人。はい？だか(ら)・・・(やむなく)待ってください。(宮城に)やっぱり代わって欲しいそうですけど。」

茜

宮城、咄嗟に銃口を茜に。茜、それに気付かずバンバンと足で何かを踏みつけ、ふと我に返り、

「・・・ゴキブリが・・・。」

茜

光子、何かを拾い、

「・・・？」

「サンダラのレンズです。もうわれちゃってますけど。」

「・・・脅かさないでください。」

「ごめんなさい。」

「あの・・・どうします？」

「また、電話しますと。」

「でも・・・。」

宮城
桐子

宮城、銃を構え直す。

桐子 「また後でかけ直すそうです。悲鳴？・・・ああ、いえ。大丈夫みたいです。今のところは、まだ被害者は。勿論気を付けます。あなた方次第ですけど。はい。失礼します。」

桐子、電話を切る。

宮城 「ありがとう。」

桐子、黙って携帯を差し出す。

宮城 「かかってきたら、あなたがでてください。」
桐子 「私が？・・・はい。」

桐子、最後尾に行こうとする。

宮城 「あなたは、そこ(⑥)に。連絡係ですから。」
桐子 「・・・。」

桐子、⑥に座る。

運転手 「高速、利用しますか？それとも、このまま下で？」
宮城 「高速なんか使ったら、すぐに着いちやうじやありませんか。」
運転手 「じゃあ、このまま。」
宮城 「お願いします。」

宮城、後ろに向き直り、銃口を向けると、乗客たち一斉に両手を挙げる。

「皆さん、ご迷惑をお掛けしてホントに申し訳ありません。私も出来ることなら怪我人は出したくないと思ってます。どうかご協力をお願いします。」

「・・・。」
「協力していただくつてのは、やっぱり難しいですか？」

「弾は、あと4発残ってます。協力していただけない人には、ここにいて貰っては困るんです。どちらなんでしょうか？」

桐子 「あの。」

宮城、銃口を桐子に向ける。桐子、両手を挙げる。

宮城 「何ですか？連絡係さん。」

桐子 「それ。向けられてると、どう返事していいのかわからなくなると思うんですけど。」

宮城 「・・・？」
桐子 「怪我人出したくないって言われながら、それ向けられてたら、何も答えられないと思いますよ。」

宮城 「・・・。」

宮城、後部の乗客方向に向く。勿論銃口も。しっかりと両手を挙げる乗客達。宮城、銃口をはずす。皆、緊張。宮城、銃口を向ける。皆、やはり緊張。

宮城 「変わりませんけど。」
桐子 「仕舞ってください。みんな言うこと聞きますから。」

宮城、皆を見る。皆、黙って頷く。拳銃を腰に仕舞う。

宮城 「・・・言うこと聞いてくださいね。」

皆、頷く。

宮城 「声を出してください。」
乗客 「はい。」
宮城 「ありがとうございます。あ、手、降ろしてください。」

桐子の携帯が鳴り、宮城の指示を待つ。

宮城 「どうぞ。」

桐子、電話に出る。

桐子 「はい。」

桐子、宮城を見る。走る緊張。

桐子

「だから、お見合いはイヤだつて言ってるでしょ。(宮城に)母です。まさか今日だつて言うんじゃないでしょうね？何勝手に決めてるの？会わないからね。ちやんと断つてよ。面子とか、そういう問題じゃなくて。そんなの母さん達の都合でしょ。あたしには、関係ないからね。それに・・・家に着くの、ちよつと予定より遅れそうだし。別に寄り道してるわけじゃなくて。ちよつと電話じゃ説明

「しにくい。しようがないでしょ。まだバス中。今、向かってるんだけど……ちよつと待って。あの、これ空港行きます……よね？」

「寄れますよ、少し遠回りになりますけど。」

「いや、空港には、ちよつと……。」

「まあ、無理ですよ？常識的に考えても。」

「ええ。終わった後だったらいくらでも。」

「どの位になりそうですか？何か知らないうちに、お見合い段取っちゃったみたいで。付き合いますか？何か知らないうちに、簡単に断れないみたいなんですよね。」

「相手次第のことなんで。申し訳ないですけど。」

「お客さん。無理言っちゃダメですよ。この人にも、この人の都合でもんがあるんですから。」

「すいません。」

「じゃあ、出来るだけ早くってことでお願いしますね。」

「努力します。それ切ったら、一度警察にかけなおしてください。」

「はい。お母さん？やっぱり、その時間に間に合わせるのは、ちよつと難しいかも。出来るだけ急いでみるけど、急ぐのはあたしじゃないから。後で話す。だから後で説明するから。間に合わなくても、あたしの所為じゃないからね。わかってる。じゃあね。ちよつと立て込んでるから切るね。それじゃあね。」

桐子、電話を切る。

「ちよつといいですか？」

「何でしょうか？」

「（晴海に）あとし後があるんで、早く終わらせちゃいたいですけど。」

「（桐子に）ちよつと待っててください。」

「警察にかけ直す前に確認しておきたいことがあるんですけど。教えてくれませんか？あなたの目的？」

「何訊いてんの？」

「あなた、随分紳士的だし。ホントに出来たら危害加えたくないって考えてるみたいだから訊かせて貰うんですけど、要求を教えてもらえませんか？」

「すみません。気にしないでください。」

東山の制止に構わず。

「さつき運転手さんが、あなたにも都合があるって言ってましたけど、あとし達にもあるんですよ。結構大変な都合が。」

「別ありませんから。」

「あるでしょ。」

「僕たちの、大したことじゃないんで。気にしないで、そのまま続けてください。電話するんですよ。」

晴海

「じゃあ、何？東山くんにとつて、あとしとの結婚は、全然大したことじゃないつたんだ。そんな軽い気持ちでいたから、あんな風に次のバス、次のバスって引き延ばしてたんだ。」

東山

「そうじゃないよ。そうじゃないけど、今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ。僕らは人質なんだよ。わかってる？人質。撃たれたらお終いなんだよ。」

晴海

「わかってる、そんなこと。」

東山

「全然わかってないよ、晴海さんは。宮城はね、」

宮城

「今、拳銃を持つてるんだよ。僕らは、彼に命を握られてるの。お父さんに結婚を許してもらう前に撃たれでもしたら、どうするつもりなの？死んじやったら、もとももないんだよ。宮城だつて、そう思う（でしょ？）」

東山

宮城

「ヒガシヤマ……さん？」

「……久しぶり。」

「！」

宮城、東山に近づき。

宮城

東山

「あなた……誰なんですか？」

「はい？」

「私のこと、随分知ってる様な口振りでしたけど。あなた一体誰なんですか？」

宮城

銃口をはずし。

「もしかして、東区の住民さん？山中商店街辺りの。」

東山

「山中商店街？」

「東区の北の方にある。違うんですか？知ってるんですけど？私のこと。」

東山

「まさか、知ってる人がいるなんて。地元から随分離れたつもりだったんだけど……いっそ、県外まで出た方が良かったんですかね。少々考えが甘かったようです。正直やりづらいですよね、知ってる人がいるっていうのは。」

宮城

再び、銃口を向け。

「（東山に）同級生じゃなかったの？」

晴海

「同級生？」

「人違いだったら構わないですよ？あなたの素性を知らなかったら、この人が、このまま人質であつても。」

宮城 「知ってるんですよ？私のこと。」

晴海 「人違いだよな？」

東山 「宮城・・・だよな？」

東山 「ちよつと、」

東山 「大丈夫だよ・・・僕の知ってる宮城は、平気で人を傷つけるような奴じゃなかった（目前に銃口が）・・・気がする・・・覚えてないかな？東部中学校で同じクラスだった、東山。」

宮城 「？」

東山 「あんまり話とかしなかったけど、出席番号が近くて、一緒の班にはよくなつてたよな。東山毅。そっか。あの頃より少し太つちやつたから、わかり難いのかな？」

晴海 「太った？」

東山 「結構ね。」

晴海 「それで太ったの？」

東山 「努力したんだ。」

宮城 「・・・コツコツ？」

晴海 「コツコツ？」

東山 「思い出してくれた？」

宮城 「コツコツ！」

東山 「うん。」

宮城 「うわあ・・・お前、太つたなあ。全然わかんなかったよ。」

東山 「そんなに太つたかな？」

宮城 「太つたよ。て、言うか、急激に太りすぎじゃないか？よくないぞ、そういうの。でもまあ、どつちかかって言うと、あの頃が細すぎたのかも知れないけどな。」

東山 「まあね。」

宮城 「で、何？結婚だつて？おめでとう。」

東山 「ありがとう。」

宮城 「ごめんな。こんなことに巻き込みちゃって。」

東山 「いいんだよ、別に。」

晴海 「よくはないでしょ。」

宮城 「すいません。」

東山 「いや、ホントにいいんだ。だからその、それ、どけてもらえないかな？」

宮城 「・・・ああ、ゴメンゴメン。」

宮城、銃を仕舞う。

晴海 「宮城さん。再会を懐かしむのはいいんですけど、質問に答えては頂けませんか？」

宮城 「ああ。要求でしたよね？」

晴海 「あたしたちの幸せな将来がかかっているんです。」

東山 「晴海さん。」

晴海 「今日を逃したら、また先延ばしになって、永遠に結婚出来ないかも知れないんだよ。」

東山 「そんなことないって。」

晴海 「ある。」

東山 「大丈夫だよ。僕、頑張るから。」

晴海 「頑張ってもどうにもならないから、こんなことなってるんでしょ？」

茜 「アアツ！！」

茜

宮城、銃口を茜に。皆も注目。張りつめる空気。

茜

宮城 「・・・交番のお巡りさんですよな？」

茜

宮城 「あなた、山中商店街の交番のお巡りさんですよな？」

茜

宮城 「警察官なんですか？」

茜

宮城 「どうして警察であるあなたが？」

茜

晴海 「制服じゃなかったから、ちよつと気づかなかつたんですけど。あたし、実家があの辺りなんですよ。何度か挨拶もしてますよね？」

茜

晴海 と、茜、かけていた眼鏡を外す。

茜

宮城 「・・・豊田さんこの・・・。」

茜 「そうです。豊田の家のものです。やっぱり流石ですよな。住民の顔、ちゃんと覚えててくれる。」

茜

宮城 「いや。すぐに気づきませんでした。」

茜 「しょうがないですよ。普段、眼鏡なんかかけてないですもん。どうしてですか？何でこんなこと？お母さんからお巡りさんのこと、よく聞かされるんです。あそここの交番に来た新しいお巡りさん・・・宮城さんは、本当にいい人だつて。警察官の鏡だつて。」

茜

光子 「あたしも茜の家に行った時、聞かされました。あのお巡りさんのお陰で、こんな物騒な世の中でも安心して過ごせるんだつて。あなたがそのおまわりさんだったんですな？」

光子

茜 「まるで自分のことのように自慢げに、いつも話すんですよ。どうしてこんなことしてるんですか？」

茜

茜 桐子の電話が鳴る。

茜

茜

茜

宮城 「出てください。」

桐子、電話に出る。

桐子 「もしもし。」

桐子、宮城を見る。走る緊張。手を差し出す、宮城。

桐子 「だから、今ダメなんだって。ごめんなさい。母です。」

宮城 「手短に。」

桐子 「後でちゃんと話すから。今、忙しいから・・・何で知ってるの？ニュースで流れてるって。」

宮城 「え？」

桐子 「ラジオはありませんよ。故障中なんです。すみませんねえ。」

晴海 「携帯で確認できるんじゃないですか？」

東山 「お願いできますか？」

桐子 「携帯の付いた携帯？」

宮城 「そのストラップのじゃないですか？」

桐子 「お願いします。」

桐子 光子、携帯でニュースを確認。

東山 「で、何て言ってるって？あたしが？違う違う。あたしは、犯人に言われて、ただ電話しただけだから。当たり前でしょ。自分の娘が信じられないの？だから、あたしが連絡係に指名されて、こうやって電話のやりとりを担当してるの。かけてきたのは、お母さんの方でしょ。」

桐子 「犯人、ふたり組になってます。男と女のふたり組だって。で、女性の方が、婦人警官の可能性有りってことになってますけど。」

東山 「警官は宮城の方だよね。」

桐子 「何であたしが犯人にされてるの？だから違うって。すみません。ちよっと、母の誤解説明してもらえませんか？」

宮城

「もしもし。犯人です。いえ。ホントにお嬢さんは、関係ありませんから。私が言うのも何ですが、信用してください。お嬢さんは、ただの人質です。私がお願いして、連絡係をして頂いたんです。すみません。出来るだけ早急に解決して、お嬢さん、お返ししますから。とんでもありません。迷惑かけてるのは、私の方ですから。はい。はい。失礼します。あ、ちよっと待ってください。」

桐子、電話を代わる。

桐子

「わかった？じゃあ、一回切るからね。電話しなきゃいけないから。警察に。心配しなくていいから。じゃあね。」

宮城

「携帯を切る。」

宮城

「すみません。」

桐子

「早く済ませて貰ってもいいですか？このままだと、実家の方にも、マスコミとか押し掛けて来ちゃいそうなのなんです。」

桐子

「取り敢えず、電話かけて頂けますか？」

宮城

「でも、何であたしってわかったんだろ？」

桐子

「婦人警官なんですか？」

宮城

「え？」

宮城、銃を構える。走る緊張。

「そうなんですか？」

桐子

「だからって、別にあなたのこと捕まえたりしませんから。あたし、今日、非番なんです。時間外の労働はしない主義なんです。」

宮城

「何故ですか？」

桐子

「あたり前じゃないですか。」

桐子

「当たり前？」

宮城

「時間外手当てが付くわけでもなし。もし仮に、まかり間違っても、あたしがあなたの事を逮捕できたとしても、上司に誉められれば御の字。大抵は『勝手な行動をとるんじゃない！』って怒鳴られるのがおちですから。第一、これで怪我でもしちゃったら、それこそ目もあてられない。何のために難しい試験受けて、公務員になったと思ってるんですか？肝心なのは、平穩無事な安定した生活。警察官も、要は、サラリーマンだってことです。日々黙々と業務をこなし、月々安定したお給料を受け取る。あたしの最終目標は、安定した公務員との結婚ですから。出来る事なら白バイ隊員がいいかな？」

宮城

「・・・だからダメなんです。そんな風だから、日本の警察は落ちたって言われてしまうんです。」

桐子

「・・・何勝手な事言ってるんですか？それ、あなた自身に言えることですよ。」

現役警察官のあなたが、バスジャックをしてるんですから。実際に罪を犯してるあなたと、時間外労働をしないあたしと、どちらが間違ってると思ってるんですか？」

宮城

桐子

桐子

東山

宮城

桐子

桐子

晴海

桐子

桐子、電話をかけようとすると。

「それは、」

「まったく……。」

「要求の交渉が成立したら、ちゃんとあたしの誤解も解いてくださいよ。」

「着信履歴。警察に番号が残ってるんですよね？」

「……あ。自分の携帯使うんじゃないかった。」

「すいません。」

「もういいです。それより、電話かけちゃいますよ。」

「待つて。まだ質問に答えて貰ってません。」

「そんなこと、もう、どうでもいいでしょ？」

宮城

桐子

宮城

「改革なんです。」

「改革？」

「私、正義の味方に憧れてたんです。物心付いた頃から、ずっと正義のヒーローになりたかった。ヒーローは、強くなければいけない。空手を習いました。優し

くなければいけない。犬と猫とハムスターとカブトムシを飼いました。そして何

より、正しい心を持っていなければならぬ。嘘をつくことを拒絶しました。そ

んな私が選んだ職業。それは日本の治安を守る警察官です。大きいことより、ま

ずは、自分の身の回りの平和を守るべく、交番勤務を切望し、住民の皆さんとふ

れあい、心を通わせ、明るく楽しい町づくりに励んできました。しかし、昨今、

世間を騒がす乱れきった日本の現状。もう私は耐えられない。確かに私ごときが

騒いだところで何がかわると思えない。しかし、何か行動を起こさないとはい

えられない。考えに考えた挙げ句、まずは警視庁内部の大掃除を試みようと思

ったわけです。取り敢えずは、迷惑を掛けっぱなしの国民の皆さんへの謝罪。

そして、無闇やたらと横行している天下り制度の撤廃を要求してみようかと。こ

んな私の我が儘に付き合われてしまった皆さんには、本当に申し訳ないと思っ

ています。でも、もう少しだけおつきあいください。お願いします。」

「バカじゃないの？こんなことしたって、何が変わるって訳でもないでしょ？第

一、こんな小さいバス会社のバスをジャックして、何の意味があるっていうの？

もうちよつと考えて行動したらどうなの？バカ丸出しじゃない。」

「その通りです。何も否定はしません。私だって、こんな事で何かが変わるとは

これっぽっちも思ってません。ただ、それをやることに意義があるんです。何も

やらないより、やった方がいいんです。私は、きつと逮捕されるでしょう。でも、

それでいいんです。誰かが、何かしらの行動を起こしたっていう事実が大切なん

です。」

運転手

「わかるよ、その気持ち。私だってね、ヒーローに憧れていた時期はあ

宮城

光子

光子

茜

光子

光子

茜

光子

みんな

光子

宮城

桐子

桐子

晴海

桐子

晴海

東山

東山

晴海

った。将来の夢は？って聞かれたら、必ずセーラームーンって答えてたよ。普段は、月野うさぎの様におちちよこちよいでも、いざとなったら、セーラームーンに変身して、命懸けで世界の平和を守る。そんなセーラームーンに、ずっとなりたかった。心底憧れてた。でもね、ある時気づいちゃったんだ。所詮 アニメはアニメ。セーラームーンにはなれないんだってね。でもね、そんな思いがあったからこそ、今、こうしてバスの運転手をやっていられる。こんな事件が起きたとき、命を掛けて乗客達を守る。そんな機会をずっと待ち望んでいたんだ。やっ

てやろうよ。腐った日本警察に一石を投じてやろうよ。」

「ありがとう。」

思いを分かち合う、ふたり。

「行方のわからないカラカラ号の情報提供を呼びかけてます。空港行きの巡回バス、カラカラ号って、このバスですよ。名古屋22か1101。このバスが警察に見つかるのも時間の問題みたいですね。」

「みっちゃん？」

「ああ、(携帯)これ。新しく情報流れてきて。」

「……。」

「あれ？だって、ニュース見てくださいって。」

「ありがとう。」

「もう、電話してもいいんですか？」

「それ協力する代わりに、あたし達にも協力してくれませんか？」

「はあ？」

「あたし達全面的に協力します。やりましょうよ。その一石を投じてるって奴。」

「は、晴海さん？」

「やろうよ、東山君。」

「やるって、何を？」

「バスジャック。宮城さんと一緒に一石を投じちゃうの。」

「嘘です。冗談です。ビックリしちゃうくらいバカバカしいアメリカンジョークです。」

「冗談なんかじゃない。本気も本気。大本気だよ。」

「バカなこと言わないでよ。僕らがしたかったのは、結婚だよ？別に革命を起こしたいとか、そんなんじゃないよ？何で警察に石投げちゃうの？」

「警察に石を投げるのは、宮城さんでしょ。あたし達が石を投げるのは、」

晴海、鞆から何かを取り出し、

「あたしのお父さん。」

茜に向ける。

東山 「晴海さん！」

その手には、拳銃。

晴海 「これで、あたし達も同罪ですよね？」

桐子 「あなた、それ。」

晴海 「今時、一般市民が持つても不思議じゃないでしょ？こうなった以上、あなた（桐子）にも、引き続き協力して貰うからね。運転手さん、悪いけど、ちよつと寄り道してもらえますか？」

運転手 「如月工務店だね？」

東山 「え？」

運転手 「あんた、如月さんとお嬢さんだろ？要するに、そっちのガリガリさんとの結婚を反対されてて、」

東山 「コツコツです。」

運転手 「お父さんを説得すべく、バスジャックを企てた。大方そんなところろ？」

東山 「何で、そこまで。」

運転手 「何年、この町でバス走らせてると思ってたんだい。この町の大抵の事情は知り尽くしてるつもりだよ。宮城の旦那、チョイと寄り道するよ。」

運転手、右にハンドルを切る。よろける乗客達。

晴海 「流石、運転手さん。話が早い。」

宮城 「私がそんなことを許すとも思ってるんですか？」

宮城、銃口を晴海に。

晴海 「え？」

東山 「宮城！」

宮城 「確かに今、私のやっつてゐることは犯罪です。しかし、私は腐っても警察官。法を守ってなんぼの世界に生きてる人間なんです。例え、今がどんな状況にありうと、目の前で起ころうとしている犯罪を見過ごすわけにはいきません。銃を捨ててください。」

東山 「ちよつと待ってよ、宮城。おかしいよ、それ。間違ってるよ。」

宮城 「すまない。コツコツ。」

東山 「何謝ってるんだよ。早くそれおろしてよ。」

宮城 「それは出来ない。」

東山 「宮城は、自分の都合で僕らを巻き込んだんだよ。例えそれが、どんな理由であらうと、僕は君に巻き込まれたんだ。そんな君の我が儘を晴海さんは、受け入

宮城

れますって言ってくれてるんだよ。そんな彼女に銃を向けるなんて、そんなのおかしいよ。」

「私は、私の信じた正義を貫く。これから私がやるうとしてゐることは、間違ってます。日本の軌道を修正する為に必要なことなんだ。言うなれば、これは必要悪。それを邪魔する者は何人たりとも見過ごすわけにはいかない。コツコツ、例えそれが君の婚約者であつてもだ。銃を捨ててください。」

東山

晴海

「宮城！」

「・・・。」

笑う桐子。

曲 O U T

桐子

「バカ丸出し。」

皆

「！」

「言つたでしょ？もつと考えて行動しなさいって。こんなことで結婚の了承を得られるって本気で思ってるの？ちよつと、そのコリコリさん。」

東山

「コツコツです。」

桐子

「要は、あんたがだらしなから、こんなことになつてゐるでしょ？しつかりしなさいよ。」

東山

「すいません。」

桐子

「で、あんた（宮城）。あんた以上にバカなことしようとしてゐる彼女（晴海）はね、理由はどうあれ、あんたに協力するつて言ってるんでしょ。意固地になつてないで、素直にありがとうの一つでも言つたらどうなの？第一、ここにいる乗客の協力がなきゃまとまる話もまもないんでしょ？」

宮城

「・・・。」

桐子

「で、どうすんの？電話するの？しないの？」

宮城

「ちよつと待ってもらえませんか？」

桐子

「あんたたちにも都合があるように、あたしにも都合があるの。どこに寄り道しようが全然構わないからさ、さつさと終わらせちゃつてよ。ちゃんと、あたしも協力するから。」

東山

「えつ？あなた・・・。」

桐子

「言つたでしょ？時間外労働はしない主義だつて。」

東山

「宮城。」

宮城

「・・・。」

茜

「必要悪なんですよね？」

晴海

「動かないで。」

茜

「それ、必要ありませんから、降ろしてください。宮城さん。あたしたちにも協力させてください。ごめん。いいよね？」

光市

「人それぞれ、誰にでも事情つてのはあります。あたしたちも石、一緒に投げちやいます。」

茜 「みっちゃん。」
光子 「いいですよね？お巡りさん。」
宮城 「……。」

運転手 「で、どこに寄ればいいんだい？宮城の旦那は、腐った日本警察に。如月さんとこのお嬢さんとボキボキさんは、」
東山 「コソコソです。」
運転手 「結婚を反対しているお父さんに。で、あなたは、一体誰に石投げつけるつもりなんだい？」

茜 「あたしたちは、」
運転手 「社長か人事部長ってところか？」
茜 「え？」

運転手 「何かしらの理由で、不当解雇を受け、謝罪と、慰謝料、或いは正当な退職金の請求ってところだろ。」
茜 「その通りです。」
宮城 「そんなこつたるうと思つたよ。で、どうするや？宮城の旦那。」

宮城 「……。」
晴海 「宮城さん。それ、降ろしてください。あたしも降ろしますから。」
東山 「……。」
宮城 「宮城。」

東山 「……これは、私が皆さんに強要したことです。皆さんは、飽くまでも人質。犯罪を犯したのは、私一人。」
晴海 「それって……。」
宮城 「これが、寄り道をするにあつての私からの条件です。それが飲めないのであるなら、皆さんの要望を受け入れることは出来ません。」

晴海 「……。」
東山 「晴海さん。」
晴海 「(東山に)でも、」

東山、晴海をジッと見つめ、
「わかりました。」
茜 「あたしたちも、それをお願いします。」
桐子 「もう、かけちゃってもいいですか？」
宮城 「お願いします。」
桐子 「まったく。」

桐子、電話をかけようとする。急ブレーキ。よろける乗客達。
「今度は、何ですか？」
運転手 「検問。」

皆 「！」
運転手 「ザッと50人てどこか。」

乗客達、前を覗き込む。
運転手 「警察も気合い入ってんねえ。どうするや？宮城の旦那。振り切るのか？それとも、ここでやめるのか？」

皆、宮城に注目。
宮城 「……。」
桐子 「いい加減にしなさいよ！この期に及んで、何悩んでるの？」
宮城 「……。」

宮城 「臨時ニュース。男女ふたり組によって占拠されたカラカラ号、つい今し方発見される！犯人のひとり、現職婦人警官と断定。日本警察の威信にかけ、人質を無事救出出来るか？」
桐子 「どうしてくれるのよ！とつとと指示出して、早く終わらせてよ！」
茜 「みんなすごい勢いで向かって来てる。」

桐子、茜
「パトカーのサイレン。」
宮城 「！」
光子 「警察って、犯人を検挙出来れば人質のことなんて、お構いなしなんですわ？」
宮城 「！」
晴海 「宮城さん！」
東山 「……。」
宮城 「宮城！」
宮城 「振り切ってください！」

曲IN
「そう来なくっちゃ。飛ばすよお客さん。しっかり掴まっててくださいよ。」
運転手 「バス、急発進、急ハンドル。」

運転手 「取り敢えず、山中島に向かうよ。」
晴海 「山中島って、うちの工場に行くにはすごい遠回りですよ。」
運転手 「あんたんとこは、二番目。まずは、そっちのリストラ組の会社に行つてから。」
茜 「うちの会社知ってるんですか？」
運転手 「各務ヶ原興業。」

急ハンドル。

運転手 「以前、バイトでそっちのルート走ったことがあるんだよ。そんな時、その冷静な姉ちゃん乗せたことがあんのさ。自慢じゃないが、一度乗せた客の顔は二度と忘れないよ。これ、商売の鉄則。」

急ハンドル。

光子 「これまでで、バスで通勤したの、数回ですよ。」
運転手 「じゃあ、そんな時に丁度あたったんだろ。各務ヶ原興行山中島支社。」
茜 「その通りです。」
運転手 「さあつ、飛ばすよ！」

曲盛り上がり、溶暗。
曲、OUT
暗闇の中、光子の声。

光子 「緊急速報。現在、逃走中の巡回バス、カラカラ号に捕らわれている人質の内、」
追って、溶明。
車内中央辺りに、光子。それを囲むように、皆。光子の言葉に注目。

光子 「女性二人は、大手株式会社各務ヶ原興行山中島支社、元社員と判明。それに対し、同興業支社長、緊急会見を開くが、発表内容は、その元社員に向けての、不当解雇に対する謝罪であった。」

皆 「おお・・・。」
光子 「一体何があったのか？何故、今、人質に対しての謝罪なのか？詳細は、以下のサイトでご覧頂けます。」
茜 「やった！」

晴海 「ホントに認めたね。あなた達に対する不当解雇。」
茜 「うん。でも、もうあの会社には戻らないけどね。」
桐子 「戻らないんじゃないかって、戻れないんですよ。」

東山 「よく認めましたね。」
桐子 「どんなに偉そうにしてる社長さんでも、所詮、人の子。家族にばらされたくないことの一つや二つはあるってことよ。でも、ホントによかったの？そこまで、相手に譲っちゃって。」

茜 「電話の向こうからだけど、あらためて謝罪の言葉を聞いたし、慰謝料も希望額、振り込むことになったしね。」
東山 「でも茜さんの会社って随分厳しいんですね。恋愛対象にまで干渉してくるなん

て。」

桐子 「何、とんちんかんな事言ってるの？散々電話のやりとり聞いてたでしょ？」

東山 「だから同じ部署の人と付き合っちゃったんですよ？それで、」

桐子 「あんたねえ。そんなことでクビになる訳ないでしょ？」

東山 「だって、社内恋愛が問題でクビになったって。それで、不当解雇って・・・、」
茜 「社長は、あたしのクビを切って、自分から遠ざけたかったんです。みっちゃんは、そんな、あたしをかばおうとして、とばっちりを食っちゃっただけなんです。」

東山 「え？何、社長って、」

茜 「あーあ、結構本気だったんだけどな。」

桐子 「でも、相手は火遊びだった。」

晴海 「最終的には、家庭が大事って事なんですよ。」

桐子 「実らぬ恋か・・・。」

東山 「不倫か！」

晴海 「バカ！」

茜 「いいんです、晴海さん。その通りです。バカなのは、あたし自身なんですから。ごめんね、みっちゃん。」

光子 「桐子さんって、写真写り、結構いいんですね。」

桐子 「は？」

光子 「容疑者の一人。長山桐子。顔写真、公開されていますよ。」

桐子 「うっそ・・・ホントに今更誤解解けるの？」

宮城 「努力します。」

桐子 「もう、この際どっちでも、いっかな・・・。」

宮城 「ダメですよ、諦めちゃ。最後まで頑張りましょうよ。」

桐子 「はあ？」

電話が鳴る。走る緊張。

宮城 「でてください。ああ、お母さんだったら、手短かにお願いします。」
桐子 「きつと、見たんですよ、今のニュース。」

桐子、電話にでる。

桐子 「お母さん？違うからね。今流れてるマスコミの情報は、間違いだから。片が付いたら、犯人さんが、ちゃんと誤解解いてくれことになってるから・・・山中島放送？ああ、ごめんなさい。え？」

光子、携帯を示し、桐子、それを目視。

桐子 「だから、あたしは人質なんですって。何回言わせるんですか？初めて聞いて・・・？犯人は別にいるんです。あたしは、ただの人質なんです。いい加減な情報流すの、

もうやめてもらえますか？ ホント迷惑してるんですよ。」

「カラカラ号を占拠する容疑者との接触に成功。現在、電話取材決行中。」

「同時中継ですね。」

「どこで、調べたのか知りませんが、もうこの番号にかけてくるのもやめてください。この電話は、警察とのやりとりに使われてるんで、いいですか？ お願いしますよ。」

桐子、電話を切る。

「テレビですか？」

「まったく、どこで調べたんだか。」

「すいません。」

「容疑者、長山桐子、かなり情緒不安定な様子。共犯者は、他にもいるのだと主張しつつ、取材陣に要求を突きつけてきた。その要求には応じかねると答えた途端、強引に電話を切る。」

「随分、ねじ曲がってますね。」

「すいません。」

「次行きますよ。次。」

「命に代えても、誤解解きますから。」

「ホントお願いしますよ。今度は、ふたり（晴海と東山）ですよ。電話する？ それとも、直接現地向かう？」

「順調にいけば、あと30分で如月工務店だね。どうするや？」

「うん・・・。」

「ちよつと、ここまで来て何悩んでんの？」

「晴海さん。ずっと考えてたんだけどね、僕たちは、どうやってお父さんに一石を投じようって考えてる？ 茜さんたちの場合は、相手の秘密を握って、それを公開しないことを条件に要求を突きつけた。宮城の場合は、僕らが人質になって、その安全を条件に要求を突きつける。だけど、僕たちは何を条件に、お父さんを説得すればいいんだろ？」

「何、今更言ってるの。あたしは、飛行機の時間があるの。早くしてよね。」

「すいません。正直言って、半分は勢いだっただけです。でも半分はホントに何とかしたかった。僕は、晴海さんとの結婚をお父さんに認めて欲しかった。だから、バスジャックしてまで結婚を許して貰おうと思っただけです。だけど人質の安全より、犯人逮捕を優先させてるかのような、警察の言動とか、茜さん達の会社のひい対応とか、マスコミのねじ曲がった情報操作とか、そんなのを目の当たりにしたら、何か・・・うん、何とか。」

「何となく何？ あなたたちは、元々バスジャックしようとしてたんでしょ？ だったら、あたしたちを人質にすればいいんじゃないの？」

「でも、そうしたら、また桐子さんが疑われるだけな気がして。ますます誤解を解くのが困難になっていくんじゃないかと。」

「何となく何？ あなたたちは、元々バスジャックしようとしてたんでしょ？ だったら、あたしたちを人質にすればいいんじゃないの？」

「でも、そうしたら、また桐子さんが疑われるだけな気がして。ますます誤解を解くのが困難になっていくんじゃないかと。」

「何となく何？ あなたたちは、元々バスジャックしようとしてたんでしょ？ だったら、あたしたちを人質にすればいいんじゃないの？」

「でも、そうしたら、また桐子さんが疑われるだけな気がして。ますます誤解を解くのが困難になっていくんじゃないかと。」

「でも、そうしたら、また桐子さんが疑われるだけな気がして。ますます誤解を解くのが困難になっていくんじゃないかと。」

「でも、そうしたら、また桐子さんが疑われるだけな気がして。ますます誤解を解くのが困難になっていくんじゃないかと。」

「ここまで来たら、濡れ衣が一枚だろうが二枚だろうが大した差じゃないですよ。」

「各務ヶ原興行支社長は、実は、正義の味方だった。」

「え？」

「同興業元社員二名は、現在、占拠されているカラカラ号の乗客を人質に、同支社長を恐喝。身代金として、3千万を要求していた疑い。同支社長は、『市民の皆様の安全が確保出来るなら。』と、コメントしており、既に身代金3千万は、用意してあるとのこと。容疑者は、主犯格、長山桐子を含む、四人の可能性があると見られる。濡れ衣、3枚になっちゃいますね。」

「ちよつと、それどういうことよ。」

「最新ニュースです。」

「みっちゃん、冷静過ぎ。」

「ここで、慌てても仕方ないから。」

「ホントにすいません。」

「でも、あたしたちの請求したのって、200万だったよね。随分な上乗せ。」

「あの、ちよつと考えがあるんですけど。」

「晴海さん？」

「やっぱりやめますなんて、言うんじゃないでしょうね。ここまで来たら、もう引き返すなんて出来ないんだからね。」

「皆さん。何とも思いませんか？ 今のニュース聞いて。」

「悔しい・・・でも、どうしたらいいのか。」

「あたしも。こう見えて、ホントは結構悔しがってますよ。」

「僕もだよ。何とも言えない気持ちだよ。」

「宮城さんの言った日本警察の現状も勿論なんですけど、茜ちゃんたちに対する社長のずるさ。要求を飲んだふりをした後の、マスコミを使つての翻し方。マスコミの情報ねじ曲げ方。これって、どうなんだろう？ 宮城さんじゃないですけど、あたしも、ホントにこれでいいのかな？ っつて。」

「だから何？ 言いたいことがあるなら、とつとと言っちゃいなさいよ。」

「人質、やめちゃいませんか？」

「待つてください。今、皆さんにやめられたら、非常に困ってしまいます。まだ私の番が終わってない。」

「そうだよ。僕たちだつてまだ、お父さんを説得してない。」

「バスジャックをやめるんじゃないやなくて、人質をやめるの。」

「既に人質とか犯人とかの関係じゃ、もうないでしょ？」

「いや。飽くまで犯人は私一人で、皆さんは人質なんです。」

「だから、それは終わった後のことでしょ。今は、協力しないと関係ない。だから、もう人質のふりなんかやめちゃって、この際、本気で石、投げちゃいませんか？」

「本気で投げる？」

晴海

「今思いつく限りの、この日本のひどいところ、みんなに向かつて思いつきり石投げちやうの。まず、日本警察と茜ちゃんとの会社は勿論でしょ。それから、情報をねじ曲げちやうマスコミ。政治家とかも一杯いるよね。ほら、汚職とか。お医者さんとか、学校の先生にも一杯いるし。あとは・・・。」

桐子

「だから、考えてもの言いなさいって言ってるでしょ。」

晴海

「桐子さんは、いいんですか？あんなねじ曲がった情報、勝手に流されて。」

桐子

「仕方ないでしょ。それに、これが終わったら、その犯人さんが、誤解解いてくれるんだし。」

宮城

「無理かもしれません。」

桐子

「はあ？」

宮城

「死にもぐるいで努力しますが、さっきの情報操作を目の当たりにすると、一抹の不安が・・・。」

光子

「主犯格、長山桐子は、容赦がなかった。カラカラ号ジャック事件の、警察への第一報は、人質のふりをした長山本人だったことが判明。電話を通しての警察との交渉の際、その隙をついて脱出を図ろうとした人質の女性を平然と蹴りつけた模様。警察関係者の話によると、電話口の向こうで、叫ぶような声をあげ、助けを乞う女性に対し、長山は、『ゴキブリ！ゴキブリ！』と連呼し、何度も蹴りつけていたとのこと。その行為は数分にも及び、再び交渉に戻った長山の向こうで、苦しうにすすり泣く女性の声に混じり、『サンガラスのレンズが割れた』と、冷静に語る女性の声もあったとのこと。人質の安否が気遣われる。」

茜

「これって、あたしとみっちゃんのことですよね？」

光子

「警察関係者って誰なんですかね？」

晴海

「桐子さん。」

桐子

「ふりだろ？と何だろうと、あたしは人質。犯人の言うことに従うしかない。判断するのは、あたしたちの命を握ってる、その犯人さん。」

晴海

「宮城さん。」

宮城

「皆さんは、いいんですか？ホントに戻れなくなりですよ。」

茜

「あたし、悔しいです。我慢出来ません。みっちゃんもだよ。」

光子

「あたしもこう見えて、実は結構悔しがってます。」

晴海

「晴海さんは、ホントにいいの？」

東山

「東山君が一緒にいてくれるなら。」

晴海

「わかった。全部終わってから、ゆっくりお父さんにお願いにしよう。」

東山

「バカじゃないの？こんなことやっちゃったら、ますます説得なんかできなくなるでしょ。」

桐子

「かも知れませんがね。」

晴海

「まさか、そんな時はあたし達にも協力してくれとか言うんじゃないでしょうね？」

桐子

「まったく。勤務時間内より忙しくなっちゃやうじゃない。」

東山

「すいません。」

晴海

「お願いします。」

桐子

「お願いします。」

東山

「お願いします。」

晴海

「お願いします。」

桐子

「お願いします。」

東山

「お願いします。」

晴海

「お願いします。」

桐子

「お願いします。」

東山

「お願いします。」

パトカーのサイレン。

東山

「あつ！」

茜

「凄手数のパトカー！」

桐子

「ちよつと。とつとと判断してよ。」

晴海

「宮城さん。」

宮城

「運転手さん。行き先変更してもらえますか？」

曲 IN

運転手

「待ってました。飛ばすよお客さん。しっかり掴まってくださいよ。」

バス、急加速、急ハンドル。

桐子

「ちよつと、ちよつと。どこに向かうつもり？」

宮城

「まずは、国会議事堂辺りを占拠してみようかと。」

皆

「おお！」

運転手

「お客さん。それは、ちよつと気が早すぎるんじゃないかな？急いで、事をし損じるってね。私の判断で、ちよいと寄り道させてもらうよ。」

急ハンドル。

運転手

「何をするにも、準備するのが、必要だろ？あんた、あと4発しか入ってない、その拳銃でどうするつもりなんだい。」

晴海

「銃ならここにも。」

東山

「ゴメン。それ、おもちや。」

晴海

「うそ？」

東山

「まさかホントにバスジャックする事になるなんて思わなかったから。」

晴海

「バカ！」

急ハンドル。

茜

「こんなのも、ありますけど。」

茜、出刃包丁を出す。

茜

「ホントはあたし達も、会社に籠城するつもりだったから。」

桐子

「でも、あなたたちの会社、随分通り過ぎてたじゃない。」

光子

「つい降り損なって。」

茜 「通り過ぎちやっってたんだよね。」
桐子 「何それ？」

急ハンドル。

桐子 「これで、どうやって議事堂を占拠するつもりなの？」

運転手 「だから、寄り道するって言ってるんだろ。バズーカの一つでも用意しとかなきゃ、やれるもんもやれないよ。」

皆 「バズーカ？」

運転手 「ここだけの話、昔、バイトでそんな仕事してたことがあるのさ。武器のことなら、このカラカラ号にお任せを！ってね。」

急ハンドル。

晴海 「運転手さんって、一体何者なの？」

運転手 「子供の頃の夢を捨てきれない、バカな大人さ。」

晴海 「セーラームーン？」

運転手 「月にかわってお仕置きよってね。」

桐子 「バカじゃないの？」

曲大きくなり、溶暗。

つづく